

鼻

ニコライ・ゴーゴリ

平井肇訳

青空文庫

三月の二十五日にペテルブルグで奇妙きてれつな事件がもちあがつた。ウオズネセンスキイ通りに住んでいる理髮師とこやのイワン・ヤーコウレヴィツチ（というだけでその苗字は不明で、看板にも、片頬に石鹼の泡を塗りつけた紳士の顔と、【鬱血こりもとります】という文句が記してあるだけで、それ以外には何も書いてない）、その理髮師とこやのイワン・ヤーコウレヴィツチがかなり早く眼をさますと、焼きたてのパンの匂いがプーンと鼻に来た。寝台の上でちよつと半身をもたげると、相当年配の婦人おんなで、コーヒーの大好き

な自分の女房が、いま焼けたばかりのパンを竈かまどから取り出して、
るのが眼についた。「きようはねえ、プラスコーヴィヤ・オーシ
ポヴナ、コーヒ―は止しにするぜ。」と、イワン・ヤーコウレヴ
イツチが言った。「そのかわり、焼きたてのパンに葱ねぎをつけて食
べたいね。」（つまり、イワン・ヤーコウレヴィツチにはコーヒ
―もパンも、両方とも欲しかったのであるが、一どきに双方を要
求したところで、とても駄目なことがわかっていて、それとい
うのも、プラスコーヴィヤ・オーシポヴナが、そうしたわがままを
ひどく好かなかつたからである。）「ふん、お馬鹿さん、欲しけ
りやパンを食べるがいいさ、こちらにはその方が有難いや。」と、
細君は肚の中で考えた。「コーヒ―が一人前あまるというもんだ

からね。」そしてパンを一つ食卓の上へ抛り出した。

イワン・ヤーコウレヴィツチは、礼儀のためにシャツの上へ燕尾服をひっかけると、食卓に向かって腰かけ、二つの葱の球に塩をふって用意をととのえ、やおらナイフを手にして、勿体らしい顔つきでパンを切りにかかった。真二つに切り割って中をのぞいてみると——驚いたことに、何か白っぽいものが目についた。イワン・ヤーコウレヴィツチは用心ぶかく、ちよつとナイフの先でほじくって、指でさわってみた。「固いぞ！」と、彼はひとりごちた。「いったい何だろう、これは？」

彼は指を突つこんでつまみ出した——鼻だ！……イワン・ヤーコウレヴィツチは思わず手を引っこめた。眼をこすって、また指

でさわって見た。鼻だ、まさしく鼻である！ しかも、その上、誰か知った人の鼻のようだ。イワン・ヤーコウレヴィツチの顔にはまざまざと恐怖の色が現われた。しかしその恐怖も、彼の細君が駆られた憤怒に比べては物のかずではなかつた。

「まあ、この人でなしは、どこからそんな鼻なんか削ぎ取つて来たのさ？」こう、細君はむきになつて呶鳴りたてた。^{どな}「悪党！

飲んだくれ！ この私がお前さんを警察へ訴えてやるからいい。何という大泥棒だろう！ 私はもう三人のお客さんから、お前さんが顔をあたる時、今にもちぎれそうになるほど鼻をひっぱるつて聞かされているよ。」

だが、イワン・ヤーコウレヴィツチはもう生きた空そらもない有様

であった。彼はその鼻が、誰あろう、毎週水曜と日曜とに自分に顔を剃あらせる八等官コワリヨーフ氏のものであることに気がついたのである。

「まあ、お待ち、プラスコーヴィヤ・オーシポヴナ、こいつはぼろきれにでも包んで、どこか隅っこに置いてこう。あとで俺が棄ててくるよ。」

「ええ、聞きたくもない！ 削ぎとつた鼻なんかを、この部屋に置いてとくなんて、そんなことを私が承知するとも思ふのかい？ ……この出来そくない野郎つたら！ 能なといえ、革砥かわとを剃刀でペタペタやることだけで、肝腎なことを手つ取り早く片づける段になると、空つきし意気地のない、のらくらの、やくざなのさ、

お前さんは！ 私がお前さんに代つて、警察で申し開きをするとしても思つてるのかい？……ああ、何てだらしのない、木偶でくの坊だろ！ さっさと持つて行つとくれ！ さあつてば！ どこへでも好きなところへ持つて行くがいいよ！ 私やそんなものの匂いだつて嗅ぎたくないんだからね！」

イワン・ヤーコウレヴィツチは、まるで叩きのめされたもののように茫然として突つ立っていた。彼は考えに考えたが、さて何をいつたい考えたらいいのか見当がつかなかった。「どうしてこんなことになつたのか、さっぱり訳がわからないや。」と、どうとうしまいに耳の後を搔きながら彼は呟やいた。「きのう俺は酔つ払つて歸つたのかどうか、それさえもう、はつきりしたことは

わからないや。だが、こいつは、どの点から考えても、まったく有り得べからざる出来ごとだて。第一パンはよく焼けているのに、鼻はいっこうどうもなっていない。さっぱりどうも、俺には訳がわからないや！」イワン・ヤーコウレヴィッチはここで黙りこんでしまった。警察官が彼の家を搜索して鼻を見つけ出す、そして自分が告発されるのだと思うと、まるで生きた心地もなかった。美々しく銀モールで刺繍をした赤い立襟や佩剣などが、もう眼の前にちらついて……彼は全身ブルブルとふるえだした。とうとう下着や長靴を取り出して、そのきたならしい衣裳を残らず身につけると、プラスコーヴィヤ・オーシポヴナの口喧ましいお説教をききながら、彼は鼻をぼろきれに包んで往来へ出た。

彼はそれを、どこか門の下の土台石の下へでも押し込むか、それとも何気なくおっことしておいて、つと横町へ外れてしまおうかしたかったのである。ところが、間の悪いことに、ともすれば知人に出つくわし、相手からさっそく「やあ、どちらへ？」とか、「こんなに早く誰の顔を剃りに行くんだね？」などと訊ねられることになったため、イワン・ヤーコウレヴィツチは、如何とも好機会をつかむことができなかった。一度などは、まんまと一物をおっことしたのであるが、おまわり巡査がまだ遠くの方から戟ほこでもってそれを指し示しながら、「おい、何か落つこちたぞ、拾いたまえ！」と注意したので、イワン・ヤーコウレヴィツチはまたもや鼻を拾いあげて、しようことなしにかくしへ仕舞いこまなければな

らなかつた。やがて、大小の店が表戸をあけはじめ、それにつれて往来の人通りがつきつきとふえて来る一方なので、彼はいよいよ絶望してしまつた。

そこで彼は、何とかしてネワ河へ投げこむことは出来ないだらうかと思つて、イサーキエフスキイ橋へ行つてみようと思つた……と。ところで、このいろんな点において分別のある人物、イワン・ヤークウレヴィツチについて、これまで何の説明も加えなかつたことは、いささか相済まない次第である。

イワン・ヤークウレヴィツチは、やくざなロシアの職人が皆そうであるように、ひどい飲んだくれで、また、毎日他人の頤あごを剃つてゐるくせに、自分自身の鬚はついで剃つたことがなかつた。

イワン・ヤーコウレヴィツチの燕尾服（イワン・ヤーコウレヴィツチはけつしてフロックコートを着なかつた）はまだらであつた。つまり、それははじめ黒であつたが、今ではところ嫌わず茶色がかつた黄色や灰色の斑紋だらけになつていたのである。それに襟は垢でてかてかと光り、ボタンが三つともとれて、糸だけ残つてゐるといふ為ていたらく体であつた。またイワン・ヤーコウレヴィツチは、大の不精ものであつたから、八等官のコワリヨーフは彼に顔をあたらせる時、いつもこう言つたものである。「イワン・ヤーコウレヴィツチ、君の手はいつも臭いねえ。」するとその返事がわりにイワン・ヤーコウレヴィツチは、「どうして臭いんでしような？」と問い返す。「どうしてか知らないけれど、どうも臭い

よ、君。」そう八等官が言うと、イワン・ヤーコウレヴィッチは嗅ぎ煙草を一服やつてから、腹いせに八等官の頬といわず、鼻の下といわず、耳のうしろといわず、あごの下といわず——一口に
いえば、ところ嫌わず手あたり次第に、石けんをやけに塗りたく
つたものである。

さて、この愛すべき一市民は、今やイサーキエフスキイ橋の上
へやって来た。彼は何よりもさきにまずあたりを見廻してから、
よほどたくさん魚でもいるかと、橋の下をのぞくようなふりをし
て、欄干によりかかりざま、こつそり鼻の包みを投げ落とした。
彼はまるで十*プードもある重荷が一時に肩からおりたように思
つた。イワン・ヤーコウレヴィッチは、にやりとほくそえみさえ

した。そこで彼は役人連の顔を剃りに行くのを見合わせて、ポンスでも一杯ひっかけてやろうと、【お料理喫茶】という看板の出ている家の方へ足を向けたが、その途端に、大きな頬鬚をたくわえた堂々たる恰幅かっぷくの巡査が、三角帽をいただき、佩剣を吊つて、橋のたもとに立っているのが眼についた。イワン・ヤークウレヴィッチはぎくりとした。ところがその巡査は彼を指でさし招いて、「おい、ちよつとここへ来い！」と言う。

イワン・ヤークウレヴィッチは礼儀の心得があつたので、もう遠くの方から無縁帽カルトウーズをとつて、小走りに近よるなり、「はい、これはこれは御機嫌さまで、旦那！」と言つた。

「うんにや、旦那もないものだぞ。一体お前は今、橋の上に立ち

どまって何をしちよったのか？」

「いえ、けっして何も、旦那、ただ顔を剃ありにまいます途中で、河の流れが早いかどうかと、ちよつとのぞいてみまただけで。」

「嘘をつけ、嘘を！ その手で誤魔化すこたあ出来んぞ。素直に返答をしろ！」

「ねえ、旦那、何なら一週に二度、いや三度でも、旦那の顔をただ無料で剃あらせていただきたいと思っておりますんで。」と、イワン・ヤーコウレヴィツチは答えた。

「何だ、くだらない！ 俺んとこへは理髮師とこやが三人も顔を剃りに来とる、しかもみんな無上の光栄だと思つちよるのじゃ。さあ、そんなことより、あすこで何をしちよったのか、ほんとうのこと

を述べてみい！」

イワン・ヤーコウレヴィツチは、さつと色を失った。ところがここでこの一件はまったく霧につつまれてしまつて、いつたいその先がどうなったのか、とんと分らないのである。

二

八等官のコワリヨーフはかなり早く眼を覺すと、唇を「ブルルツ……」と鳴らした。自分でもこれはいったいどういう原因からか、説明する訳にゆかなかつたが、とに角、眼を覺すといつてもやる癖であつた。コワリヨーフは一つ伸びをすると、テーブルの上

に立ててあつた小さい鏡を取り寄せた。昨夜、自分の鼻の頭に吹き出したにきびを見ようと思つたのである。ところが、おつ魂消たまげたことに、鼻はなくて、その場所あとがまるですべすべののつぺらぼうになつてゐるではないか！ 仰天したコワリヨーフは水を持って来させて、タオルで眼を拭つたが、確かに鼻がない！ 手でさわつて見たり、これは夢ではないかと、我が身をつねつてみたりしたが、どうも夢ではなさそうだ。八等官コワリヨーフは寢台からとび起きざま、武者ぶるいをしてみた——が、やはり鼻はなかつた！ 彼はさつそく着物を持つて来させて着換をすると、真直に警視總監の許へ行こうと表へ駆け出した。

ところで、これが一体どんな種類の八等官であつたか、それを

読者に知らせるために、この辺でコワリヨーフなる人物について一言しておく必要がある。八等官といつても学校の免状のお蔭でその官等を獲得したものと、コーカサスあたりで成りあがった者とは、まるで比べものにはならない。この両者は全然、類を異にしている。学校出の八等官の方は……。だが、このロシアという国は実に奇妙なところで、一人の八等官について何か言おうものなら、それこそ、西はリガから東はカムチャツカの涯はてに至るまで、八等官という八等官がみな、てつきり自分のことだと思いで、八等官といや、これは八等官に限らず、どんな地位官等にある人間でもやはり同じこと。さて、このコワリヨーフはコーカサスがえりの八等官であつた。それも、この官等についてからま

だやつと二年にしかならなかつたため、片時もそれを忘れることができず、そればかりか、なおいつそう品位と威厳を添えるため、彼は単に八等官とはけつして名乗らず、常に少佐と自称していた。「あのね、おい」そう彼は胸むね衣あてを売っている女に街で出逢うと、きまつて言つたものだ。「俺の家うちへ来てくれ。住いはサドワヤ街だよ。コワリヨーフ少佐の家はどの辺かと訊きさえすれば、誰でも教えてくれるからね。」そして相手が、ちよつと渋皮の剥けた女でもあれば、その上に内証の用事を言いつけてから、「ね、好い女こだから、コワリヨーフ少佐の家うちつて訊くんだよ。」とつけ加えたものである。だからわれわれもこれから先は、この八等官を少佐と呼ぶことにしよう。

さて、コワリヨーフ少佐には毎日ネフスキイ通りを散歩する習慣があつた。彼の胸むねあて衣のカラーはいつも真白で、きちんと糊付がしてあつた。その頬鬚は今日でも、県庁や郡役所付の測量技師とか、建築家とか、連隊付の軍医とか、また各種の職務にたずさわっている連中で、おおむね頬が丸々と肥えて血色がよく、ボストン・カルタの上手な手合によく見うけられる種類のもので、つまりその頬鬚は頬の中ほどを走つて真直に鼻の脇まで達していた。いつもコワリヨーフ少佐は紅玉こうぎよくずい髓の印形を沢山もっていたが、それには紋章のついたのや、「水曜日」「木曜日」「月曜日」などど彫ほつたのがあつた。コワリヨーフ少佐がこのペテルブルグへやつて来たのは、それだけの要件があつたのことで、つまり、自

分の官等にふさわしい務め口をさがすためであった。うまく行けば副知事を、さもなければ、どこか重要な省の監察官あたりを狙っていたのである。コワリヨーフ少佐には結婚する意志がない訳ではなかったが、但しそれは花嫁に持参金が十二万もついている場合に限られていた。されば今や読者には、かなり立派で尋常な鼻のかわりに、ひどく馬鹿げてつるつるした、平べったい跡形を見た時のこの少佐の胸中がどんなであったかは、自ずから察しがつくであろう。

あいにく、通りには一台の辻馬車も見当たらなかったのも、彼はマントに身をくるみ、さも鼻血にでも困っているような恰好に、ハンカチで顔をおさえて、てくてくと歩いて行くよりほかはなか

った。「だが、もしかしたら思い違いかも知れないぞ。そうむやみに鼻がなくなる訳はないから。」こう思つたので、彼は鏡をのぞいてみるために、わざわざ菓子屋へ立ち寄つた。好いあんばいに店には誰もいなかった。小僧たちが部屋の掃除をしたり、椅子をならべたりしているだけで、中には寝呆ねぼけ眼まなこをして、焼きたてのケーキを盆にのせて運び出している者もあつた。テーブルや椅子の上には、コーヒの汚点しみのついた昨日の新聞が散乱していた。「いや、これは有難い、誰もいないや。」と、彼は呟いた。「今なら、見てやれるぞ。」彼はおずおず鏡に近寄つて、ひよいと中をのぞいた。「畜生め！ 何という醜態げまだ！」彼はそう口走つて、ペツと唾を吐いた。「せめて鼻の代りに何かついていゝならまだ

しも、まるつきり何もないなんで……」

いまいまして唇をかんで菓子屋を出た彼は、日頃の習慣に反して、誰にも眼をくれたり、笑顔を見せたりはすまいと肚をきめた。ところが、不意に彼は或る家の入口の傍で棒立ちになつて立ちすくんでしまった。じつに奇態な現象がまのあたりに起こつたのである。一台の馬車が玄関前にとまって、扉とがあいたと思うと、中から礼服をつけた紳士が身をかがめて跳び下りるなり、階段を駆けあがつていった。その紳士が他ならぬ自分自身の鼻であることに気がついた時のコワリヨーフの怖れと驚きとはそもいかばかりであつたらう！ この奇怪な光景を目撃すると、眼の前のものが残らず転倒してしまつたように思われて、彼はじつとその場に

立っているのも覚束なく感じたが、まるで熱病患者のようにブルブルふるえながらも、自分の鼻が馬車へ戻つて来るまで、どうしても待つていようと決心した。二、三分たつと、はたして鼻は出て来た。彼は立襟のついた金の縫い取りをした礼服になめしかわ鞣皮のズボンをはいて、腰には剣を吊っていた。羽毛はねのついた帽子から察すれば、彼は五等官の位にあるものと断定することができる。前後の様子から察して、彼はどこかへ挨拶に来たものらしい。ちよつと左右を見まわしてから、馭者に、「馬車をこちらへ！」と叫んで、乗り込むなり駆け去ってしまった。

哀れなコワリヨーフは気も狂わんばかりであった。彼はこのよ
うな奇怪千万な出来事をどう考えてよいのか、まるで見当がつか

なかった。まだ昨日までは彼の顔にちやんとついていて、ひとりで馬車に乗ったり歩いたりすることのできなかつた鼻が、まつたく、どうして礼服を着ているなどということがあり得よう！ 彼は馬車の後を追つて駆けだしたが、さいわい、馬車は少し行つて

*カザンスキイ大伽藍の前でとまつた。

彼は急いで、よくこれまでそれを見て嘲笑わらつたりした、顔じゆうを繙帯して、二つの穴から眼玉だけ出している乞食の老婆の立ちならんでいる間を押し分けるようにして、伽藍へ駆けつけるなり、堂内へ飛びこんだ。堂内には参詣人も少しあつたが、彼らは皆、入口の間近たたずに佇んでいた。コワリヨーフはひどくどきまぎし

て、今は祈禱を捧げるなどという気力の少しもないことを感じた。

彼は隅から隅へと、鼻の姿を探し求めたが、やがて一方に当の相手の佇んでいる姿を見つけた。鼻は例の大きな立襟の中へ顔をすっかり隠して、ひどく信心深そうな様子で祈祷を捧げていた。

「どうして、あいつに近づいたものかな？」と、コワリヨーフは考えた。「服装なりがれつきとしており、おまけに五等官と来てやあがる。」

彼は相手の傍らに立って咳払いをしはじめたが、鼻は寸時もその信心深そうな姿勢をくずさず、しきりに礼拝している。

「もし、貴下あなた、」と、コワリヨーフは無理にも心を鞭打って、

「あの、もし貴下あなた……」

「何か御用で？」と、鼻が振りかえって答えた。

「わたくしには不思議でならないのですよ、貴下……どうも、その……。御自分の居どころはちゃんと御存じのはずです。それなのに、意外なところでお目にかかるものでして、いったいここはどこでしょう？ お寺ではありませんか。まあ、思ってもみて下さいい……」

「どうも、おっしゃることが理解のみこめません、もつとはつきりおっしゃって下さい。」

【どう説明したものだろう？】と、コワリヨーフはちよつと考えながら、勇を鼓してこう切りだした。「もちろん、わたくしはその……。それはそうと……。どうも、鼻なしで出歩くななんて、そうじゃありませんか、これが、あのウオスクレセンスキイ橋あた

りで皮剥ぎ蜜柑みかんを売っている女商人か何ぞなら、鼻なしで坐つていても構わないでしょうがね。しかし万々のまちがいもなく今に知事の口にありつかれようとしている人間にとつては、その……いや、わたくしには何が何やらさっぱりわからないのですよ、貴下。(こう言いながら、少佐は肩をすぼめた……)失礼ですけれど、もしもこれを義務と名誉の法則に照らして考えますなら……あなた御自身よくおわかりのことでございませうが……」

「いや、さっぱりわかりませんねえ。」と、鼻が答えた。「もつとよくわかるように説明して下さい。」

「ね、貴下、」コワリヨーフは昂然として言った。「わたくしには、あなたのお言葉をどう解釈していいかわからないのです……。」

この際、問題は明々白々だと思えますがねえ……それとも、お厭なんで……。だって、あなたは——このわたくしの鼻ではありませんか！」

鼻はじつと少佐を眺めたが、その眉がやや気色ばんだ。

「何かのお間違いでしょう。僕はもとより僕自身です。のみならず、あなたとの間に何ら密接な関係のあるべきいわれがありません。お召しになっている、その略服のボタンから拝察すれば、大審院か、あるいは、少なくとも司法機関にお勤めのはずですが、僕は文部関係のものですからね。」こう言うなり、鼻はくるりと向きを変えて、再び祈祷にうつった。

コワリヨーフはすっかりまごついて、はたと言句につまっしてし

まった。【どうしてくれよう?】彼はちよつと考えた。その時、一方から氣持のよい婦人の衣きぬずれの音が聞えて来た。かなり大柄な全身にレースの飾りをつけた、どこかゴチック建築に似たところのある中年の貴婦人が入つて来た。それと一緒に、すらりとした姿に大変よく似合つた服をつけ、カステーラ菓子みたいにふわりした卵色のボンネットをかぶつた、華きやしや奢な娘がやつて来た。二人の後では、大きな頬髯をたくわえて、カラーを一ダースもつけていそうな、背の高い紳士が立ちどまつて、やおら嗅かぎ煙草入の蓋をあけた。

コワリヨーフはつかつかと進み寄つて、胸衣の、バチスト麻のカラーを摘み出して形をととのえ、時計につけていた印いんぎよう形を

直すと、あたりへ微笑をふりまきながら、そのなよなよしい娘の方へじつと注意を凝らした。娘は春さく花のように、わずかに頭を下げると、半ば透きとおるような指をした色の白い手を額ひたいへ持つていった。そのボンネットのかげから、娘の頤あごの端と頬の一部を見て取ると、コワリヨーフの顔の微笑はさらに大きく拡がった。が、その途端に、まるで火傷でもしたように彼は後へ跳び退いた。自分の顔の鼻の位置がまるで空地になつてゐることを想い出したのである。眼からは涙がにじみ出した。そこで彼は、くだんの紳士に向かつて、お前は五等官の贗物だ、お前はペテン師で悪党だ、お前は俺の鼻以外の何者でもないのだと、単刀直入に言つてやろうと心を取り直した……。が、鼻はもう、そこにはいなかった。

また誰かのところへ挨拶をしに、まんまと擦りぬけて行ってしまったのだらう。

コワリヨーフは会堂の外へ出た。ちようど好い時刻で、陽はさんさんとして輝いており、ネフスキイ通りは黒山のような人出であつた。婦人連も、まるで洪水のように押し流されている。……

おや、彼の知り合いの七等官がやつて来る。コワリヨーフはこの男のことを中佐中佐と呼んでいた。殊に局外者の前でそう呼んだものである。あ、向こうにカルイジキンの姿も見える。これは大審院の一係長で、彼とは大の親友だが、ボストーン・カルタを八人でやると、いつも負けてばかりいる男だ。おや、あすこから、コーカサスで八等官にありついた、もう一人の少佐が、こちらへ

手を振っておいでおいでをやっている……。

【ちえつ、くそ喰えだ！】コワリヨーフはこう呟いてから、「おい、辻馬車！ まっすぐに警察部長のところへやれ！」

コワリヨーフは馬車に乗り込むと、「全速力でやれ！」と、ひたすら馭者をせきたてた。

「警察部長は御在宅ですか？」と、玄関へ入るなり彼は呶鳴った。「いや、おいでになりませんよ。」という玄関番の答えだ。「たった今お出かけになったばかりで。」

「さあ、困ったぞ！」

「はい、まったく、」と玄関番はつけ加えた。「それもつい今しがたお出かけになりましたので。もう、ほんの一分も早ければ、」

御面会になれたかもしれませんのに。」

コワリヨーフはハンカチを顔にあてたまま、馬車に乗りこむと、
自暴^{やけ}くそな声で「さあ、やれ！」と呶鳴った。

「どちらへ？」と馬車屋が訊ねた。

「真直ぐに行け！」

「え？ 真直ぐにね？ だってここは曲り角ですぜ。右へですか、それとも左ですか？」

この問いがコワリヨーフの心を制して、再び彼を考えさせた。かような事態に立ち至ったかぎりには、さしあたり治安の府に訴えるのが順当であった。というのは、直接これが警察に關係のある事件だからというよりも、警察の手配が他のどこよりもはるかに

敏速に行なわれるからであつて、鼻が勤めていると言つた役所の手を経て満足な結果を期待しようなどは、まったく沙汰のかぎりです、すでにあの鼻との問答それ自体からわかるように、あいつには少しも神妙なところがなから、今度も先刻と同じ調子で、こんな男とは一面識もないと言ひ切つて、まんまと誤魔化してしまふに違ひないからである。そういう訳でコワリヨーフは、安寧の府たる警察署へ行くように、馭者に言いつけるばかりになつたのであるが、急に考えが變つて、あのペテン師の悪党野郎はすでに初対面の時からして、あんな凶々しい態度をとつたほどであるから、いい潮時を見て、まんまと都落ちをしようかもしれない。もしそうなつたら、あらゆる捜査も水の泡だ、水の泡で

ないまでも、まる一カ月は長びくだろう、それでは堪らんたまと彼は思ったが、やがて天から彼に名案が授けられたようである。これはひとつ、真直ぐに新聞社へ駆けつけて、いち早く、彼奴きやつの特徴を詳細に書いた広告を出すことにしようと思つたのである。そうすれば、誰でも彼奴を見つけ次第、さつそく彼のところへ突き出してくれるなり、少なくとも奴の在所を知らせてくれるに違いない。そう決心すると、彼は馬車屋に、新聞社へ行けと命じて、途中も絶えず「こら、もっと早くやれ！ 畜生、もっと急ぐんだ！」と呶鳴りながら、馬車屋の背中を小突きつづけた。馭者は頭かぶりを振り振り、「いやはや、この旦那は！」とつぶやいては、まるで*スパニエル犬のように毛のながい馬の背を手綱で鞭打った。

ようやく馬車がとまると、コワリヨーフはハアハア呼吸いきをはずませながら、あまり大きくもない受付室へ駆けこんだ。そこには古びた燕尾服を着て眼鏡をかけた白髪の係員がテーブルに向かつて、ペン軸を口にくわえたまま、受けとった銅貨の勘定をしていた。「広告を受け付ける方はどなたですか？」とコワリヨーフは呶鳴つて、「あ、今日は！」

「はい、いらつしやい。」そう言つて、白髪の係員はちらと眼をあげたが、そのまま又、うずたか堆くつまれた銭の山へ視線をおとした。

「ちよと掲載して貰いたいことがあるんですが……」

「どうかしばらくお待ち下さい。」そう言つて係員は、片手で紙に数字を記入しながら左手の指でそろばん算盤の玉を二つ弾はじいた。モー

ル飾りをつけた、よほど貴族的な家に雇われているらしく小ぎつぱりした身なりの従僕が、一枚の書付を手に持ってテーブルの傍に立っていたが、自分の気さくなところを見せるのが礼儀だとも思ったのか、こんなことを言っている。

「ね、旦那、その狎ちんころといえ、十カペイカ銀貨八枚の値打もない代物ですよ、もつともわつしなら二カペイカ銅貨八枚も出さやしませんかね、そいつを伯爵夫人の可愛がりようといったら、それあ大変なものでしてね、その小犬を探し出してくれた人には、お礼に大枚百ルーブルだすというのですよ！ まったくのところが、現にわつしと旦那とだつてそうですが、人間の好き嫌いで奴は実に様々なものですねえ。好きとなったが最後、ポインターだの

ブードルだのという犬を飼って、五百ルーブルでも千ルーブルでも気前よく投げ出す人がありますが、その代り犬も上物でなければね。」

分別くさい係員は大真面目な顔つきで聴き耳を立てながら、それと同時に、提出された原稿の文字が幾字あるかを勘定していた。あたりには皆それぞれ書付を手にした、老婆だの、手代だの、門番だのといった連中が多勢立っていた。その書付には、品行方正なる馭者、雇われたしというのもあれば、一八一四年パリより購入、まだ新品同様の軽馬車、売りたいしというのもある。そうかと思つと、洗濯業の経験あり、他の業務にも向く十九歳の女中、雇われたしとか、堅牢な馬車、但し弾機ばね一個不足とか、生後十七年、

灰色の斑ぶちある若き悍馬かんばとか、ロンドンより新荷着、蕪かぶおよび大根の種子とか、設備完全の別荘、厩うまや二棟ならびに素晴しき白樺もみまたは縦もみの植込となし得る地所つきといったものも見受けられ、また、古靴底の買手募集、每晚八時より午前三時まで競売というようなのもあった。すべてこうした連中の押しかけていた部屋は手狭であつたため、室内の空気がひどく濁つていた。けれど、八等官のコワリヨーフはその臭いさえ感じなかつた。というのは、ハンカチを当てていたからでもあるが、第一、肝腎の鼻そのものが、一体どこへ行つたのやら皆目わからないていたらく為て体たいであつたからである。

「時に、ぜひひとつお願いしたいのですが……非常に緊急な用事

なんでして。」と、とうとう我慢がなくなつて、彼は口を切つた。

「はい只今、只今……。二ルーブルと四十三カペイカ也と……。只今すぐですよ！……一ルーブル六十四カペイカ也と！」そう言いながら白髪紳士は、老婆や門番連の眼の前へ書付を投げ出しておいて、「ところで貴方の御用は？」と、ようやくコワリヨーフの方を向いて訊ねた。

「わたしのお願いは……」と、コワリヨーフが言った。「詐欺ともペテンともつかぬものに引掛りましてね——それが今もつて、どうしてもわからないのです。で、その悪党をわたしのところへ引っぱって来てくれた人には、相当の謝礼をすると掲載していた

「できればよろしいんです。」

「ところで、お名前は何とおっしゃいますか？」

「いや、名前など訊いて何になさるのです？ そいつは申しあげられませんよ。何しろ知り合いがたくさんありますからね。例えば五等官夫人のチエフタリヨワだの、佐官夫人のペラゲヤ・グリゴリーエヴナ・ポドトチナだのといったあんばいに……。それで、もしもそんな人たちに知れようものなら、それこそ大変です！ ただ、八等官とか、いやそれより、少佐級の人物とでもしておいで下さればいいでしょう。」

「で、その逃亡者というのは、お宅の下男ですね？」

「下男などじゃありませんよ！ そんなのなら、別に大したこと

ではありませんがね！ 失踪したのは……鼻なんで……」

「へえ！ それはまた珍しい名前ですな！ で、その鼻氏とやらは、よほどの大金を持ち逃げしたんですか？」

「いや、鼻というのは、つまり……誤解されては困りますよ！

つまり、わたし自身の鼻のことで、それがね、どこかへ失踪して、わからなくなってしまったのです。畜生め、人を馬鹿にしやがって！」

「だが、どうして失踪したとおっしゃるんです？ どうもよく会得のみこめませんが。」

「どうしてだか、わたしにもお話のしようがありませんがね、しかし彼奴が今、市まちじゆうを乗り廻して、五等官と名乗っているこ

とは事実です。だから、そやつを取り押えた人が一刻も早くわたしのところへしよびいて来てくれるように、ひとつ広告を出していただきたいとお願ひしてるんですよ。まあ、ほんとうに、お察し下さい、こんな、^{からだ}軀のうちでも一番に目立つところを無くしては立つ瀬がないじゃありませんか！ これは、足の小指か何かとは訳が違いますよ。そんなものなら、たとえ無くても、靴さえはいておれば、誰にもわかりっこありませんからね。わたしは木曜日にはいつも、五等官夫人チエフタリヨワのところへ行きますし、佐官夫人ペラゲヤ・グリゴリーエヴナ・ポドトチナだの、その娘さんで、とても綺麗な令嬢だのも、やはり非常に懇意な知り合いなんですからねえ。お察し下さい。いったいこのさきどうして：

…。わたしはもう、あの人たちの前へ顔出しすることもできませんん！」

係員は何か思案をめぐらすように、きつと唇をひきしめた。

「いや、そういう広告を新聞に掲載する訳にはまいりません。」
と、しばらく黙っていた後、やっと彼が言った。

「どうして？ なぜですか？」

「どうしてもこうもありません。新聞の信用にかかわります。人の鼻が逃げ出したなんてことを書くようなら……。すぐに、あの新聞は荒唐無稽な与太ばかり載^のせると言われますからね。」

「でも、この事件のどこに荒唐無稽なところがありますか？ ちつともそんな点はないと思いますが。」

「そう思えるのは、あなたにだけですよ。先週もそんなようなことがありましたっけ。さる官吏の方がちようど今あなたがおいでになっているように、ここへやって来られましてね、原稿を示されるのです。料金を計算すると二ルーブルと七十三カペイカになりましたが、その広告というのが、何でも黒毛の彪むくいぬ犬に逃げられたというだけのことなんで。別に何でもないようですが、じつはそれが誹謗でしてね、彪犬というのはその実、何でもよくは憶えていませんが、さる役所の会計係のことだったのです。」

「何もわたしは彪犬の広告をお頼みしているわけではありません、わたし自身の鼻のことなんですよ。ですから、つまり自分自身のことと同然です。」

「いや、そういう広告は絶対に掲載できません。」

「だって、わたしの鼻はほんとに無くなっているのですよ！」

「鼻が無くなったのなら、それは医者の縄張ですよ。何でも、お好みにだいにどんな鼻でもくつつけてくれるというじゃありませんか。それはそうと、お見受けしたところ、あなたはひょうきんな方で、人前で冗談をいうのが好きなんでしょう。」

「冗談どころか、神かけて真剣な話です！ よろしい、もうこうなれば仕方がない、じゃあ、ひとつお目にかけましょう！」

「なに、それには及びませんよ！」と、係員は嗅ぎ煙草を一服やりながら言葉をつづけた。「しかしお差支えがなかったら、」と、好奇心を動かしながらつけ加えた。「ひとつ拝見したいもんです

なあ。」

八等官は顔のハンカチをのけた。

「なるほど、これは奇態ですなあ！」と、係員が言った。「跡が、まるで焼きたてのパン・ケーキみたいにつるつるしてますねえ。よくもまあ、こんなに平べったくなつたもので！」

「さあ、これでもまだ文句がありますかね？ 御覧のとおりですから、どうしても掲載していただかねばなりません。ほんとに恩にきますよ。それに、こんな御縁でお近づきになれて、大変うれしいんです。」少佐は、この言葉でもわかるとおり、今度は少しおべつかを使う気になつたのである。

「掲載するのは、無論、何でもありませんがね、」と係員は言っ

た。「しかし、そんなことをなすつても、何のお利益ためにもなるまいと思ひましてね。それよりも、いつそ、筆のたつ人に頼んで、この前代未聞の自然現象できごとを文章に綴つて、それを【*北方の蜂】にでもお載せになつたら、（と、ここでまた彼は嗅ぎ煙草を一服やつて、）それこそ若い者の教訓ためにもなり、（そう言つて、今度は鼻をこすつた。）また大衆にも喜ばれることでしょうから。」

八等官はがっかりしてしまつた。彼が新聞の下の方の欄へ、ふと目をおとすと、そこに芝居の広告が出ていて、美人として評判の、さる女優の名前に出つ喰わしたので、すんでのことに彼の顔はほころびかかり、その手は*青紙幣あおざつの持ち合せがあつたかどうかと、かくしの中をまさぐつていた。というのは、コワリヨーフ

の考えによれば、およそ佐官級の者は上等席におさまらなければならぬからであつた。しかし、鼻のことを考えると、何もかもがおじやんであつた。

広告係の方もコワリヨーフの苦境にはつくづく心を打たれたものらしかった。相手の悲しみを幾分でも慰めてやろうと思ひ、せめて言葉にでも同情の意を表わすのが当然だと考えて、「まつたく、飛んだ御災難で、ほんとお気の毒です。嗅ぎ煙草でも一服いかがですか？　頭痛や気鬱を吹き払いますし、おまけに痔疾にも大変よろしいんで。」こういいながら広告係は、コワリヨーフの方へ煙草を差し出して、器用にくるりと蓋を下へ廻した。その蓋には、ボンネットをかぶった婦人の肖像がついていた。

この不用意な仕草がコワリヨーフをかつといきり立たせてしまった。「人をからかうにも場合があるでしょう。」と、彼は憤然として言った。「御覧のとおり、わたしには、ものを嗅ぐ器官がないのですよ！　ちえつ、君の煙草なんか、くそ喰^{くら}えだ！　もうもう、こんな下等な*ベレジナ煙草はもとより、*ラペーの飛びきりだつて、見るのも厭だ！」こう言い棄てるなり、彼はかんかんになつて新聞社を飛び出すと、そのまま分署長のところへ出かけて行つた。

コワリヨーフがそこへやつて行つたのは、ちようど分署長が伸びをして、大きなあくびを一つして、「ええつ、ぐつすり二時間も寝てやるかな！」とつぶやいた時であつた。だから、八等官の

入来が時機を得ていなかたことは予測に難くない。この分署長は、あらゆる美術や工芸の大の奨励家であつたが、何よりも政府おかみの紙幣に愛着を持っていた。「これに限るよ。」そう言うのが彼の口ぐせだつた。「これに優るものはまずない。餌もいらねば、場所塞ぎにもならず、いつもかくしにおさまつていて、おつことしたとて——壊れもせずさ。」

分署長ははなはだ冷淡にコワリヨーフを迎えると、食事の後で審理をするのは適当でないとか、腹を満たしたら、すこし休息するのが自然の掟だおきて（こう言われて八等官は、この分署長は先哲の残した箴しんげん言になかなか詳しいんだなど見てとつた。）とか、ちやんとした人なら鼻を削ぎ取られるなどということはありません。

と言った。

まさに急所を突かれた形である！ それにここでちよつと指摘しておきたいのは、コワリヨーフがひどく怒りっぽい人間であったということである。自分自身のことならば、何を言われてもまだ我慢ができたけれど、地位や身分に関しては、断じて許すことができなかつた。芝居の狂言などでも、尉官に関してなら、すべて大目に見て差し支えないが、いやしくも佐官級の人物に楯つくなどという場面は絶対にいけないという考えを持っていた。で、その分署長の応対ぶりにすっかり面喰つた彼は、ブルツと首を震わせると同時に、少し両手を拡げながら、自負心をこめるようにして言った。「どうも、そう、あなたの方から侮辱がましいこと

をおっしやられては、まったく二の句がつけませんよ……」そして外へ出てしまった。

彼は極度に疲れて我が家へ立ち帰った。もはや黄昏たそがれであつた。こうしてさまざまに無駄骨を折つたあげくに見る我が宿は、世にも惨めな、きたならしいものに思われた。控室へ入つて見ると、汚れきつた革張りの長椅子に長々と仰向けに寝そべつた下僕のイワンが、天井へ向けて唾を吐きかけていたが、それがまたじつに見事に同じ場所へ命中するのであつた。その暢気さ加減には、コワリヨーフもさすがにかつとなり、帽子でイワンの顔を殴ぶつて嘔鳴りつけた。「この豚め、いつも馬鹿な真似ばかりしてやがつて！」

イワンはとつきにがばと起きざま、急いで後へまわって外套をぬがせた。

少佐は自分の部屋へ入ると、ぐったり疲れた惨めな我が身を安楽椅子へ落としたが、やがてのことに二つ三つ溜息を吐いてからこう呟やいた。

「ああ、ああ！ 何の因果でこんな災難にあうのだろう？ 手がなくても、足がなくても、まだしもその方がましだ。だが、鼻のない人間なんて、えたいの知れぬ代物しろものはない——鳥かと思えば鳥でもなし、人間かと思えば人間でもなし——そんな者は摘みあげて、ひと思いに窓から抛り出してしまおうがいいんだ！ これが戦争でとられたとか、決闘で斬られたとか、それとも何か俺自身

が原因もとでこうなつたのなら諦めもつくが、まるで何の理ことわり由もなしに消え失せてしまつたのだ、ただ無くなつてしまやがつたのだ、一文にもならず……いや、どうもこんなことつて、ある訳がない。一少し考えてから、彼はこうつけ足した。「どうも、鼻が無くなるなんて、おかしい、どう考えてもおかしい。これはきつと、夢をみているのか、それとも、ただ幻想を描あいているだけに違ちがひない。ひよつとしたら、顔を剃あつた後で鬚につけて拭くウオツカを、どうかして水と間違えて飲んだのかもしれないぞ。イワンの阿房あほうが取り片づけしておかなかつたため、ついうっかり飲んだのかも知れない。一そこで、酔つ払っているかいないかを、実際に確かめようとして、少佐は力まかせに我と我が身をつねつた

が、あまりの痛さに、思わずあつと悲鳴をあげたほどであった。この痛さによつて、彼が現実に生きて行動していることが確実に証明された。彼はこつそり鏡の前へ忍びよつて、ひよつとしたら鼻はちやんとあるべき場所ところについているのかも知れないと思ひながら、まず眼を細くして恐る恐るのぞいてみたが、その殺那せつな、思わず「なんちう醜面つらだ！」そう口走つて後へ飛びのいた。

これはまったく合点のゆかないことだった。たとえばボタンだとか、銀の匙しだとか、時計だとかが紛失したのならともかく——無くなるものにも事をかいて、どうしてこんなものが無くなったのだろう？ それも、おまけに自分の家うちでと来ている……コワリヨーフ少佐はいろいろの事情を総合した結果、この一件の原因もと

をなしているのは、正しく彼に自分の娘を押しつけようとしている佐官夫人ポドトチナに違いないという仮定が、もつとも真相に近いのではないかと考えた。なるほど彼の方でもその娘に、好んでちやほやしてはいたが、最終的な決定は避けていた。それで佐官夫人から明らさまに、娘を貰ってほしいと切り出された時にも、自分はまだ年も若いから、もう五年も役所勤めをした上でなければ、——そうすれば、ちょうど四十二歳になるしするからなどと言つて、世辞でまるめて、やんわり体をかわしてしまつたのである。それで佐官夫人が、てつきりその腹いせに彼の面相を台無しにしてくれようものと、わざわざそのために魔法使の女でも雇つたのに違いない。さもなければ、いくらなんでも鼻が削ぎ取られ

るなんてことは、夢にも考えられないことである。誰ひとり彼の部屋に入って来たものはなし、理髪師とこやのイワン・ヤーコウレヴィツチが顔を剃あつてくれたのはまだ水曜日のこと、その水曜日いっばいはもちろん、つぎの木曜日もずっと一日じゅう、彼の鼻はちやんと満足についていたのである——それははつきり記憶にあって、彼もよく知っている。それに第一、痛みが感じられねばならないはずだし、もちろん、傷口にしても、こんなに早くなおつて、薄焼きのパン・ケーキみたいにつるつるになる訳がない。彼は表沙汰にして佐官夫人を法廷へ突き出してやろうか、それとも自ら彼女のところへ乗り込んで膝詰談判をしてやろうかなどとつおいつ頭の中でいろんな計画を立てていた。と、不意に扉のあ

らゆる隙間からパツと光りがさして彼の思案を中断してしまった。これによつて、イワンがもう控室でろうそくをつけたことが知れた。間もなく、そのイワンがろうそくを前へ差し出して、部屋中をあかあかと照らしながら入つて来た。とつさにコワリヨーフのした動作は、急いでハンカチを掴みざま、昨日まで鼻のついていたところへ押しあてることであつた。とにかく、愚かな下男などというものは、主人のこんな浅ましい顔を見ると、えて呆気にとられ勝だからである。

イワンがきたない自分の部屋へ引きさがるよりも前に、控室で「八等官コワリヨーフ氏のお宅はこちらですか？」という、聞きなれない声が出た。

「どうぞお入り下さい。少佐のコワリヨーフは手前です。」そう
言つて、急いで跳びあがるなり、コワリヨーフは扉をあけた。

入つて来たのは、毛色のあまり淡くもなければ濃くもない頬髯^{うす}を
生やし、かなり頬ぺたの丸々した、風采のいい警察官で、それ
は、この物語のはじめに、イサーキエフスキイ橋のたもとに立っ
ていた巡査である。

「あなたは御自分の鼻を無くされはしませんか？」

「ええ、無くしました。」

「それが見つかりましたよ。」

「な、何ですつて？」と、コワリヨーフ少佐は思わず大声で口走
つた。彼はあまりの嬉しさに、ろくろく口もきけなかつた。彼は

眼を皿のようにして、自分の前に立っているおまわり巡査の顔を見つめた。相手の厚ぼったい唇と頬の上にろうそくの灯がチラチラふるえていた。「ど、どうして見つかりましたか？」

「変な機会からでしてね、あやうく高飛びをされる、きわどいところで取り押えたのです。奴はもう乗合馬車に乗り込んで、リガへ逃げようとしていました。旅行券もとつくに或る官吏の名前になつていましたね。不思議なことに、本官でさえ最初は奴を紳士だと思ひこんでいたのです。が、幸い眼鏡を持っておりましたので、すぐさまそれを鼻だと見破つたのです。本官は近眼でしてね、あなたが鼻の先に立たれても、ぼんやりお顔はわかりますが、鼻も髯も、皆目、見分けがつきません。手前のしゆうと姑、つまり愚妻の母

ですなあ、これもやつぱり何も見えないのです。」

コワリヨーフはそれどころか、心もそぞろに「で、かやつはどこにいるのです？ どこに？ わたしはすぐにでも駆けつけますから。」とせきたてた。

「その御心配には及びませんよ。御入用な品だと思いましたが、ちやんとここへ持参いたしました。ところで奇態なことに、重要な本件の共犯者がウオズネセンスキイ通りのインチキ理髪師でしたね、現に留置所へぶちこんでありますよ。本官は大分まえから、どうも彼奴は飲んだくれで、窃盗もやりかねない奴だと知らんでいました。つい一昨日のこと、ある店からボタンを一揃いかつぱらいましたね。時に、あなたの鼻には全然異状がないようです

。「素晴らしいながら、巡査はかくしへ手を入れて、そこから紙にくるんだ鼻を取り出した。」

「あつ、これです！」と、コワリヨーフは頓狂な声をあげて、

「確かにこれです！ まあ御一緒にお茶を一つ召上つて下さい。」

「いや、おおきに有難いですが、そうはしておられません。これから懲治監の方へ廻る用事があるので……。時に日用品の騰貴はどうです……。手前のところには姑、つまり愚妻の母ですなあ、それもおりますし、子供がたくさんありましてね、特に長男は大いに見込みのある奴です、なかなか利巧な小件でして。だが、養育費にはまったたく手を焼きます……。――」

巡査の立ち去つた後もなおしばらく、八等官は妙に漠然とした

心持で、ぽかんとしていたが、ようやく二、三分たつてから、初めて物を見たり感じたりすることができるようになった。あまりに思いがけない悦びが、彼をこのような放心状態に陥れたのであった。彼はやつと見つけることのできた鼻を、用心深く両手に受けて、もう一度それをしげしげと打ち眺めた。

「うん、これだ！ 確かにこれだ！」と、コワリヨーフ少佐はつぶやいた。「ほら、この左側にあるのは、きのうできたにきびだ。少佐はあまりの嬉しさに、げらげら笑い出さんばかりであった。

しかし、何事も永続きのしないのが世の習いで、どんな喜びもつぎの瞬間にはもうそれほどではなくなり、更にそのつぎにはい

っそう気がぬけて、やがて何時とはなしに平常ふだんの心持に還元してしまう。それはちようど、小石が水に落ちてできた波紋が、ついには元の滑らかな水面に返るのと同じである。コワリヨーフは分別顔に戻るとともに、まだ事は落着いたのではないと気がついた。なるほど鼻は見つかったけれど、今度はこれをくつつけて、もとの座に据えなければならぬのだ。

【もし、くつつかなかつたら、どうしよう？】

こう我と我が胸に問いかけた時、少佐の顔はさつと蒼ざめてしまった。

名状し難い恐怖を覚えながら、彼はテーブルの傍へ走りよると、うっかり鼻を斜めにくつつけたりしてはならぬと、鏡を引きよせ

た。両手がブルブル震えた。彼は用心の上にも用心をしながら、鼻をそつと、もとのところへ当てがった。けれど、南無三！なむさん鼻はくつつかないのだ！……彼はそれを口許へ持つて行って、自分の息でちよつと暖めてから、ふたたび、頬と頬との中間の、つるつるしたところへ当てがった、が、鼻はどうしても喰つついていない。

【さあ、これさ！　ちやんと喰つつかないのか、馬鹿野郎！】と、彼は躍起になってぼやいたが、鼻は木石のように無情く、まるでコルクみたいな奇妙な音をたててはテーブルの上へおっこちるのだった。少佐の顔はひきつるように歪んだ。【どうしてもくつかないのかなあ！】と、彼はあわてて口走った。けれど、何度そ

れを本来もとの場所へ当てがってみても、依然として、その躍起の努力も水泡に帰した。

彼はあわただしくイワンを呼んで、医者を迎えにやった。その医者は同じ建物の中二階にある、はるかに上等の部屋を領していた。堂々たる風采の男で、見事な漆黒の頬髯と、みずみずしくて健康な妻を持ち、毎朝、新鮮なりんごを食べ、四十五分もかかって含嗽うがいをしたり、五通りものブラシで歯をみがいて、口の中をこの上もなく清潔に保っていた。医者はすぐさまやって来た。彼はまず、いったいこの災難はいつ頃起こったのだと訊ねてから、コワリヨーフ少佐の顎に手をかけて、顔を持ちあげた。そして親指で、前に鼻のあった場所ところをぽんと叩いたので、少佐は思わず首を

後へ引いたが、勢いあまつて、壁に後頭部をぶつつけてしまった。医者は、なに、大丈夫と言って、もう少し壁からはなれたらいいと注意してから、まず首を右へ曲げさせて、前に鼻のあつた場所ところを手でさわって見て、「ふうむ！」と言った。つぎに首を左へ曲げさせると、また「ふうむ！」と言った。そして最後に、また親指でぽんとやったので、コワリヨーフ少佐はまるで齒をしらべられる時の馬のように、首をうしろへすっこめた。こんな風に試してみたあげく、医者は首をふりながら、こう言った。

「いや、これあいけない。矢張りこのままにしておくんですなあ。下手にいじくれば、いつそういけなくなりますよ。それあ、無論、くつつけることはできませんがね。何なら今すぐにだつてつけてさ

しあげますが、しかし正直のところ、かえってお為めによくありませんよ。」

「飛んでもない！ どうして鼻なしでいられますよう！」と、コワリヨーフは言った。「これ以上、悪くなりっこありませんよ。ちえつ、まったく、こんな馬鹿な恰好であるもんじやない！

こんな変てこな面つらをしてどこへ出れましょう？ わたしの知り合いは立派な家庭ばかりです。現に今晚も二個所の夜会に出席なきやなりません。何しろ交際が広いものですからね。五等官夫人チエフタリヨワだの、佐官夫人ポドトチナだの……もつともこの夫人ひとは、こんな酷い仕打をなされたかぎり、今後交渉をもつとすれば警察沙汰以外にはありませんがね。ほんとうに後生ですから、

ひとつ、」と、コワリヨーフは歎願するような声で言葉をつづけた。「何とかならないものでしょうか？ とにかくどんな風にもつけてみて下さい。よくても悪くても構いません、どうにか、くつついてさえいればいいんです。危なっかしい折には、そつと片手で押えていてもいいのです。それに、うっかりした動作でいためてはなりませんから、ダンスもしないことにします。御来診のお礼には、もう、資産の許すだけのことは必ずいたしますから……」

「いや、手前はけつして、」と医者は、高くもなければ低くもない、が、懇々とした、非常に粘りづよい声で言った。「けつしてその、利慾のために治療を施しているのではありません。それは

手前の抱懐する主義と医術とに反するからです。いかにも往診料はいただきます。しかしそれは拒絶してかえつて気を悪くされてはと思えばこそです。無論、この鼻にしても、つけてつけられなくはありませんよ。しかし、それはかえつて悪くするばかりだと申しあげているのです。これほど誠意をもつて申しあげても、手前の言葉を信じていただけかれませんか。まあ自然のなりゆきに任せるのが一番ですよ。そして冷たい水で精々洗うようになさいます。なあに、鼻はなくても、あつた時同様、健康で暮らせませよ。それに何ですよ、この鼻は壘へ入れてアルコール漬にしておくか、もつと手をかければ、それに強いウオツカと沸かした酢を大匙に二杯注ぎこんでおくのです——そうすれば、相当うまい

金儲けができますよ。あまり高いことさえおっしゃらなければ、手前が頂戴してもいいんですがね。」

「いんにや、駄目です！ 幾らになっても売るもんですか！」と、コワリヨーフ少佐は自棄やけに呶鳴った。「腐つても譲りませんよ！」
「いや、失礼しました！」と、医者は暇いとまを告げながら言った。

「何とかお役にたちたいと思つたのですが……。是非もありません！ でもまあ、手前の骨折りだけは見ていただきましたから。」
こう言うと、医者は堂々とした上品な態度で部屋を出て行った。
コワリヨーフは相手の顔色にさえ気もつかず、恐ろしく茫然としたまま、わずかに医者の黒い燕尾服の袖口からのぞいていた雪のように白い清潔なワイシャツのカフスを眼に留めただけであつた。

そのすぐ翌る日、彼は告訴するに先だつて、佐官夫人に手紙を出して、夫人が彼に当然返すべきものを文句なしに返してくれるかどうか一応問い合わせて見ることに肚をきめた。その内容はつぎのようなものであつた。

拝啓

貴女のとられたる奇怪な行動は近頃もつて了解に苦しむところに御座候。かような振舞によつて貴女は何ら得られるところとて之これな無く、小生をして余儀なく御令嬢と結婚せしめ得るなどとは以つての外のことと御承知あつて然しかるべく候。小生の鼻に關する一件も、その首謀者が貴女を措いて他に之無きことと同

様、明々白々の事実にて候。鼻が突如としてその位置を離れ、或は一官吏の姿に変装し、或はついに本来の姿に返りて逃走するなど、こは貴女、ないしは貴女と同様まことに上品なる仕事に従事する輩やかの操る妖術の結果に他ならず。よつて、万一上述の鼻にして今日中に本来の位置に復帰せざるに於ては、小生は已むを得ず法律による防衛に訴える他之無きことを前以つて御通告申しあぐるを小生の義務と存ずる次第に御座候。

さりながら、貴女に対し全幅の敬意を捧げつつ、貴女の忠順なる下僕たることを光栄と存じ候。

プラトン・コワリョーフ拜

アレクサンドラ・グリゴリーエヴナ様

拝復

お手紙を拝見いたし、この上なく驚き入りました。打ち割つたところ、思いもよらぬことにて、まして、あなた様より身に覚えもなきかようなお咎めを蒙ろうなどは、ほんとうに夢にも思いがけないことでございました。第一、あなた様のおつしやるような官吏などは、変装したのもしないのも、ついで家へ寄せつけたこともございませぬわ。もつとも、フィリップ・イワーノヴィツチ・ポタンチコフさんなら、おいでになったことがございます。御品行もよく、ごく真面目で、たいへん学問もおありになる方で、宅の娘をお望みのようでしたけれど、あの

方が少しでも当てに遊ばすようなことは、わたくしけつして匂わせもしませんでしたわ。お手紙にはまた、鼻のことが書いてございましたが、あれはわたくしがあなた様に鼻をあかせる、つまり、正式にお断わり申しあげるとでもお考えになつてのことでございますましたなら、当方こそ意外に存じます次第にて、それはむしろあなた様の方からおつしやつたことで、わたくし共は、御存じのとおり、全く反対の考えでございました。それ故、只今あなた様から正式にお申し込み下さいますれば、すぐにも娘は差しあげるつもりでおります。それこそ、常々わたくしの心より切望していることでございますもの。では、そうなれかしと祈りつつ擱筆いたします。かしこ。

アレクサンドラ・ポドトチナ

プラトン・グジミツチ様

【そうか】と、コワリヨーフは手紙を読み終つてつぶやいた。

【すると夫人には何の罪もなさそうだな。こいつは訝おかしいぞ！

それにこの手紙の書きぶりは、罪を犯した人間の書きぶりとはまるで違う。】この八等官は、まだコーカサスにいた頃、何度も犯罪事件の審理に出張したことがあるので、こういうことには明るかった。【では、いったいどうして、何の因果でこんなことが起こつたのだろうか？ ちえつ、てんでまたわからなくなつてしまつたぞ！】しまいにかう言つて彼はがっかりしてしまつた。

そうこうするうちに、この稀有な事件の取沙汰は都の内外に拡がって行つたが、よくある例^{ため}しで、いつかそれにはあられもない尾^{おひれ}鰭がつけられていた。当時、人々の頭が何でも異常なものへ異常なものへと向けられており、ごく最近にも磁気学の実験が公衆の注意を惹いたばかりの時であつた。その上、コニューシエンナヤ通りの*踊り椅子の噂もまだ耳新しい頃であつたから、たちまち、八等官コワリヨーフ氏の鼻が毎日かつきり三時にネフスキイ通りを散歩するという評判がぱつと立つたのも、別に不思議ではなかつた。物見だかい群集が毎日わんさと押しかけた。誰かが、今ユニケル商店に鼻がいても言おうものなら、たちまちその店のまわりには黒山のような人ばかりがして、押すな押すなの雑

沓で、はては警官の派遣を仰がねばならない始末であつた。劇場の入口などで、いろんな乾菓子を買つていた、頬髯をはやした人品卑しからぬ一人の香具師は、わざわざ丈夫で立派な木の腰掛を幾つものしらえて、一人に八十カペイカで物ずきな連中を腰掛けさせていた。ある老巧の陸軍大佐は、それが見たいばかりに、わざわざ早目に家を出て、群集を押しわけ押しわけ、やつとの思いでそこへ割り込んだものだが、じつに癩にさわることには、店の窓先で見たものといえ、鼻どころか、ありふれた毛糸のジャケツと一枚の石版刷の絵だけで、その絵というのは、靴下を直している娘と、それを木蔭から窺っている、折襟のチョッキを着て、頤髯をちよつぴりはやした伊達者だてものを描いたもので、もうかれこれ

十年以上も同じところにかかっているものであった。そこを離れた大佐はさも忌々いまいましげに、「どうして世間は、こんなくだらない、嘘八百の噂に迷わされるのだろうか？」とつぶやいた。それからまた、コワリヨーフ少佐の鼻が散歩するのはネフスキイ通りではなく、タウリチエスキイ公園だとか、そこへ姿を現わすのはもうずっと前からのことで、あすこにまだ*ホズレフ・ミルザ卿が住んでいた頃も、この不思議な自然の悪戯に奇異の眼を見張ったものだとかいう噂が飛んだ。外科医学専門学校の学生の中には、それを見に出かけるものもあつた。ある名流の貴婦人などは、公園の管理人にわざわざ手紙を出して、ぜひうちの子供にその珍しい現象を見せて貰いたい、もしできることなら少年のために教訓

になる説明をつけてやって欲しいなどと頼んだほどであった。

この一件に横手を打って喜んだのは、せつせと夜会に通う社交界の常連で、彼らは婦人おんなを笑わせるのが何より好きであるのに、その頃はとんと話の種に窮していたからである。もつとも少数の、分別もあり気品も高い人々は、すこぶる不満であった。一人の紳士などは、どうして文明開化の現代において、こんな愚にもつかぬでたらめな話が流布されるのかとんとわからない、それにまた、政府がこれに一顧の注意も払わないのはじつにけしからんと言つて憤慨した。どうやら、この紳士は何から何まで、はては日常の夫婦喧嘩の末に至るまで干渉を望む手合の一人であつたらしい。それについて……だがここで、またもやこの事件は迷宮

に入ってしまった、この先それがどうなったかは、まるでわからな
いのである。

三

この世の中にはじつに馬鹿馬鹿しいこともあればあるものだ。
時にはまるで嘘みたいなこともあつて、かつては五等官の制服で
馬車を乗り廻し、あれほど市^{まち}じゆうを騒がせた当の鼻が、まるで
何事もなかつたように、突如としてまた元の場所に、つまりコワ
リヨーフ少佐の頬と頬のあいだに姿を現わしたのである。それは
四月も七日のことであつた。眼をさまして、何気なく鏡をのぞく

と鼻があるのだ！ 手でさわって見たが——正しく鼻がある！

「うわっ！」と声をあげたコワリヨーフは、喜びのあまり部屋じ

ゆうをはだし跣足のままで飛びまわろうとしたが、ちようどそこへイワ

ンが入って来たため妨げられてしまった。早速、洗面の用意をさ

せて、顔を洗いながら、もう一度鏡をのぞくと——鼻がある！

タオルで顔を拭きながら、またもや鏡を見ると——鼻がある！

「おいイワン、ちよつと見てくれ、俺の鼻にきびができたよう

だが。」そう言っておきながら、さて肚の中では、こと「大変だぞ、

もしやイワンが『いいえ、旦那様、にきびどころか、肝腎の鼻が

ありやしませんや！』とでも言ったらどうしよう！」と思った。

しかし、イワンは「何ともありませんよ。にきびなんか一つも

ありません。きれいなお鼻でございますよ！」と言った。

「ちえつ、どんなもんだい！」と、少佐は心の中で歓声をあげて、パチンと指を鳴らした。その時、入口からひよっこり姿を現わしたのは理髪師とこやのイワン・ヤーコウレヴィツチであったが、その動も作のこしはたった今、脂肉を盗んで殴ぶちのめされた猫みたいに、おどおどしていた。

「第一、手はきれいか？」と、コワリヨーフはまだ遠くから呶鳴りつけた。

「へえ、きれいで。」

「嘘をつけ！」

「ほんとに、きれいですよ、旦那様。」

「ようし、見ておれ！」

コワリヨーフは腰をおろした。イワン・ヤーコウレヴィツチは彼に白い布をかけると、刷毛を使って見る見る彼の頤髯と頬の一部をば、まるで商人の家の命名日なづけびに出されるクリームのようにしてしまった。「なるほどなあ！」と、イワン・ヤーコウレヴィツチは例の鼻をじろりと眺めながら心の中でつぶやいた。それから今度は反対側へ小首を傾げて、横側から鼻を眺めた。「へへえ！

実際、考えてみるてえとなあ、まったくどうも。」と心でつぶやきつづけながら、彼は長いあいだ鼻を眺めていた。が、やがて、そつとできるだけ用心ぶかく二本の指をあげて、鼻のさきを摘もうとした。こうするのがそもそも、イワン・ヤーコウレヴィツチ

の方式であつた。

「おい、こら、こら、何をするんだ！」と、コワリヨーフが呶鳴りつけた。イワン・ヤーコウレヴィツチはびっくりして両手をひくと、ついぞこれまでになく狼狽してしまった。が、やがてのことに、注意ぶかく顎の下へ剃刀を軽くあてはじめると、相手の嗅覚器官に指をかけないで顔を剃るといふことは、どうも勝手が違つて、やり難かつたけれど、それでもまあ、ざらざらした親指を相手の頬と下歯齦はぐきにかけてただけで、ついに万難を排して、ともかくも剃りあげたものである。

それがすつかり片づくとき、コワリヨーフはすぐさま大急ぎで衣服を改め、辻馬車を雇つて真直に菓子屋へ乗りつけた。店へ入る

なり、彼はまだ遠くから、「小僧っ、チョコレート一杯！」と呶鳴ったが、それと同時に素早く鏡の前へ顔を持って行つた——鼻はある。彼は朗らかに後ろを振り返ると、少し瞬きをしながら、嘲るような様子で二人の軍人をちらと眺めた。その一人の鼻はどうみてもチョコツキのボタンより大きいとは言えなかつた。そこを出ると、かねがね副知事の椅子を、それが駄目なら監察官の口をとしきりに奔走していた省の役所へ赴いた。その応接室を通りすぎながら、ちらと鏡をのぞいてみた——鼻はある。つぎに彼は、もう一人の八等官、つまり少佐のところへと出かけた。それは大の悪口屋で、いつもいろんな辛辣な皮肉を浴びせるものだから、彼はよく、【ふん、何を言つてやがるんだい、ケチな皮肉屋め！】

と応酬したものである。で、彼は途々みちみち、「もし、奴さんがこの俺を見て笑いころげなかつたら、それこそてつきり、何もかもがあるべきところについている確かな証拠だ」と考えた。ところが、その八等官も別に何とも言わなかつた。「しめ、しめ！　どんなもんだい、畜生！」と、コワリヨーフは肚の中で考えた。帰る途中で、娘をつれた佐官夫人ポドトチナに出会つたので、挨拶をすると、歓声をあげて迎えてくれた。して見れば、彼の身には何の欠陥もない訳だ。彼は婦人連とかなり長いあいだ立ち話をしていたが、ことさら嗅ぎ煙草入れを取り出して、彼女たちの前でともゆつくりと二つの鼻の孔へ煙草を詰めこんで見せながら、肚の中では、「へ、どんなもんだね、牝めんどり鶏さん！　だが、どのみち

娘さんとは結婚しませんよ。ただ、単に Par amour 《パーラムール》（色ごととして）ならお相伴しますがね！」と、空嘯うそぶいていた。さて、それ以来コワリヨーフ少佐はまるで何事もなかったように、ネフスキイ通りだの、方々の劇場だの、その他いたるところへ遊びに出かけた。同じように鼻も、やはり何事もなかったように、彼の顔に落着いて、他所へ逃げ出そうなどという気配けはいは少しも見せなかった。それから後というものは、コワリヨーフ少佐はいつ見ても上機嫌で、にこにこ微笑わらっており、美しい女という女を片っ端から追っかけまわしていたものだ。そればかりか、一度などは ゴスチンヌイ・ドウオール 百軒店の或る店先に立ちどまって、何か勲章の綬のようなものを買っていたが、いったい、それをどうするつ

もりなのかさっぱり見当がつかなかった、というのは、まだ御本人が勲章など一つも持っていなかったからである。

さて、我が広大なロシアの北方の首都みやこに突発した事件というのは、以上のようなものであった！ つらつら考えて見るに、どうもこれには真実まことらしからぬ点が多々ある。鼻が勝手に逃げ出して、五等官の姿で各所に現われるというような、まるで超自然的な奇怪事はしばらく措くとして——コワリヨーフともあろう人間に、どうして新聞に鼻の広告など出せるものではないくらいのことがわからなかったのだろうか？ こう申したからとて、別に、広告料がお安くなさそうだったからというような意味ではない。そんなものは高が知れているし、第一わたしは、それほどがりがり

亡者でもない。が、どうもそれは穏かでない、まずい、いけない！ それにまた、焼いたパンの中から鼻が飛び出したなどというのも訝おかしいし、当のイワン・ヤーコウレヴィツチはいったいどうしたのだろうか？……いや、わたしにはどうもわからない、さっぱり訳がわからない！ が、何より奇怪で、何より不思議なのは、世の作者たちがこんなあられない題材をよくも取りあげるといふことである。正直なところ、これはまったく不可解なことで、いわばちようど……いや、どうしても、さっぱりわからない。第一こんなことを幾ら書いても、国家の利益ためには少しもならず、第二に……いや、第二にも矢張り利益ためにはならない。まったく何が何だか、さっぱりわたしにはわからない……。

だが、まあ、それはそうとして、それもこれも、いや場合によつてはそれ以上のことも、もちろん、許すことができるとして：
：実際、不合理というものはどこにもあり勝ちなことだから——
だがそれにしても、よくよく考えて見ると、この事件全体には、
実際、何かしらあるにはある。誰が何と言おうとも、こうした出来事は世の中にあり得るのだ——稀にはあるが、あることはあり得るのである。

一八三三—一八三五年作

訳注

ブード——重量単位、一六・三八キロに当る。

カザンスキ大伽藍——アレクサンドル一世が当時の著名な建築家ウオロニヒンをして造営せしめた大伽藍（一八一一年竣工）で、優美な円頂閣やコリント式の豪華な柱廊に結構をきわめている。

スパニエル——愛玩用の小形の彪犬。

北方の蜂——一八〇七年ペテルブルグで発刊された月刊雑誌。同じくペテルブルグで一八二五年から四十年間にわたり続刊された新聞。ここでは後者を指すものと思われる。

あおざつ青紙幣——五ルーブル紙幣のこと。紙幣の色により、当時五ル

ーブル紙幣を青紙幣、十ルーブル紙幣を赤紙幣と称した。

ペレジナ煙草——南ロシア産の下等な安煙草。

ラペー——フランス煙草の名称。

踊り椅子。この踊り椅子についてはプーシキンもその日記（一八三三年十二月十七日付）に記して笑っている。——「市中で妙な出来事が噂されている。主馬寮、某の家で家具が急に動いたり跳ねたりしだした、というのだが、N曰く、これはきつと宮廷用の家具がアニチコフ（宮廷）へ入ることを切望してるんだ、と。」

ホズレフ・ミルザ卿——一八二九年、ニコライ一世と協約のためロシアに来た、有名なペルシアの政治家。

青空文庫情報

底本：「外套・鼻」岩波文庫、岩波書店

1938（昭和13）年1月20日第1刷発行

1965（昭和40）年4月16日第20刷改版発行

※底本で使用されている「《》」はルビ記号と重複しますので「【】」に改めました。

入力：柴田卓治

校正：柳沢成雄

1999年1月26日公開

2006年4月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

鼻

ニコライ・ゴーゴリ

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫
著者 平井肇訳
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>